

第4回帯広市立小中学校適正規模・適正配置市民検討委員会 議事要旨

平成28年7月22日（金）19:00～

本庁舎10階第2会議室

1 開会

2 会議

- (1) 第2回及び第3回帯広市立小中学校適正規模・適正配置市民検討委員会議事要旨の確認
- (2) 教育に関する意識調査の結果
- (3) 通学区域（校区）
- (4) エリア・ファミリーによる小中連携
- (5) 適正化に向けた取組み
- (6) その他

3 閉会

【配布資料】

資料 19 第2回帯広市立小中学校適正規模・適正配置市民検討委員会議事要旨

資料 20 第3回帯広市立小中学校適正規模・適正配置市民検討委員会議事要旨

資料 21-1 教育に関する意識調査の結果（概要版）

資料 21-2 教育に関する意識調査の結果

資料 22-1 小中学校通学区域図

資料 22-2 小中学校の通学区域関連図

資料 22-3 スクールバス運行図

資料 22-4 学校別通学距離一覧

資料 23-1 エリア・ファミリー構成表

資料 23-2 エリア・ファミリー配置図

資料 23-3 エリアごとの取組み

資料 23-4 おびひろっ子9年教育プログラム（エリア・ファミリー構想）のパフレット

資料 24 学校別児童生徒数等の推計

資料 25 道内各市の適正規模及び通学距離

1 開会 委員 12名中、10名出席

【資料の確認】

2 会議

委員長

議題（1）第2回と第3回の帯広市立小中学校適正規模・適正配置市民検討委員会議事要旨の確認ですが、何かご質問やご意見はございませんか

- んか。
- 委員全員 なし。
- 委員長 それでは、議題（２）教育に関する意識調査の結果を議題とします。事務局、説明をお願いします。
- 【事務局説明】 資料 21-1 資料 21-2
- 委員長 今回の説明に対して、何かご質問やご意見はございませんか。
- 委員 保護者の回答は、女性が9割以上で、お父さんはあまり答えていないので、偏りはないのでしょうか。数的には、市街地の回答が多くなるような気がします。市街地と農村部の回答は、どうなのでしょう。
- 事務局 確かに全体としてはそのとおりで、学校ごとの分析も行っています。農村部では1クラスの人数が少ないことから、一人の回答の割合が高めに影響します。
- 委員 今までの議論で、農村部と市街地は分けて考えるべきということ、小規模ゆえに良い所もあれば、悪い所もあるということなど、色々と整理されつつあると思いますが、農村部の保護者や子どもは、「小規模の方が良い」と思って回答しているのですか。
- 事務局 児童生徒では問7、保護者では問9ですが、農村部の小学生は、今のクラスの状況が大きく影響しています。現在のクラスが1クラスであれば1クラスが良いとの回答、複式学級であれば複式学級または1クラスが良いとの回答が多い状況にあります。また、保護者は2クラス、または3～4クラスが良いという回答が多いです。中学生では3～4クラスが多いというところもありますし、1クラスが良いというところもあります。保護者の場合は、複数以上のクラスが良いと回答されている状況です。
- 委員 子ども達は、今のままでいいと理解しているけれど、保護者は、できれば複数以上がいいということなのですね。
- 委員 問18で、「地域の活動や行事に参加したことはありますか？」とは、どういう意図で聞いているのですか。何か、規模と関連はあるのですか。
- 事務局 今回の教育に関する意識調査は、教育全般についての調査ですから、子どもにとって地域との関わりをどのように捉えているのか、お聞きしたかったということです。農村部だと、繋がりが非常に強いので、高めに出ています。中学生になると、興味も薄れてくるということもあるのかもしれませんが、自分が好きな行事がないということもありますので、割合が低くなっています。
- 委員 エリア・ファミリーや小中連携モデル校などは、地域の活動に参加していますか。

- 事務局
事務局 エリア・ファミリーは、市内全ての中学校区でやっております。
概要版には記載していないのですが、本編の34ページと48ページに、小中学生それぞれの参加しない理由を記載しています。小学5年生は、「参加する機会がないから」が最も多く56人。次に、「少年団活動等々で、時間がない」、「興味がない」というのが、46人、45人となっています。48ページの中学生の場合は、「興味がない」が54人、「参加する機会がない」が50人、「クラブ活動等で時間がない」が40人となっています。
- 委員 問27の「小中一貫教育のすすめ方は？」の回答からは、保護者は、一貫教育をすすめることに反対ではないが、慎重なのか、わからず、この回答をどう解釈すればいいのでしょうか。
- 事務局 肯定的と捉えていいと思います。2割の方が「よくわからない」と回答されていますが、6割強の方が、何らかの形でやるべきという肯定的な意見だと捉えております。
- 委員 「エリア・ファミリーの取組みを全く知らない」保護者が、半分以上なのですね。また、「どう思うか？」との問いは、知らない人に聞いてもわかりませんよね。
- 委員 このエリア・ファミリーは、ここ2・3年、非常に活発になってきてはいますが、今の段階では、地域の人達を巻き込んだ活動事例があまりないのです。小学校と中学校の交流や、中学校の先生が小学校に行って英語の指導をすること、お互いに公開研究会を見に行くことなどの先生方の交流が主体なので、知られていないのが当然と感じます。
- 委員 保護者はあまり知らないということですね。
- 委員 そこがまず1つあるのと、小学生、中学生が、意外と地域の活動に参加していないのは、学校と地域の関わりがまだまだ薄いことが、原因と感じます。地域の人も学校に携っていないし、学校ももっと地域に飛び込んでいかなければだめですが、まだ具体的なところまでしていないのが背景にあると思います。
- 事務局 先ほどの質問ですが、本編の95ページの間25で、エリア・ファミリーの記載があり、「幼稚園・保育所から小学校、小学校から中学校と「育ち」と「学び」をつなぐため、中学校区を単位にエリア・ファミリーとして連携を進めています。エリア会議や公開研究会などへの先生の相互参加を通じての交流、中学生の保育体験や小学校への中学校の先生派遣など、様々な学習機会も生まれています。」というように、取組みの内容を記載して、次の96ページの「取組みについて、どう思うか」という設問にしています。

委員長 他にありませんか。なければ、次の（３）通学区域を議題とします。
事務局、説明をお願いします。

委員長 【事務局説明】 資料 22-1 資料 22-2 資料 22-3 資料 22-4
今の説明に対して、何かご質問、ご意見ございませんか。

委員長 1つの小学校から2つ以上の中学校に分かれてしまう状況もあります。
同じところの中学校に行ければいいように思うのですが。

委員 昔、新しい学校が開校したら、よく児童数の数合わせで校区割りして
いましたよね。同じ小学校から同じ中学校というのが理想だと思います。

事務局 校区の設定は、随分昔のことになってしまうので分かりかねる部分
があるのですが、基本的には新しい学校が開校した時に、学校までの距離
や町内会で分けているはずですが、町内会が分かれるケースというのは、
あまりないと思いますが、校区の児童生徒数も大きな要因だったのでは
ないかと思っています。このことを考慮しながら、地域の住民と協議して決
定したと考えています。校区については、花園小学校のように3つに分
れてしまうところもあるほか、市民からの要望も多くあります。

委員 町内会単位なのですね。

委員 全体的にはほんのわずかですが、一部の町内会の中で分かれたりした
ところもありました。

委員 町内会は発足した経緯があるので、校区の変更は物理的に難しいです
ね。町内会が、2つ又は3つの学校にまたがっていると、避難場所の関
係で揉めます。これから町内会を分け、こっちの小学校に入れるよう
にはできないですよ。地域コミュニティから考えると、1つの校区にこ
れだけの町内会というのが、理想的だと思います。先程の話から、地域
コミュニティがすごく大事だということが分かってきましたので、徐々
に変えていくのがいいのではないかと考えています。

事務局 通学区域の関係ですが、長いスパンで見直す必要は出てくるのかと思
います。例えば、今の豊成小学校は、南の方に移転しましたが、その時
には通学区域を見直して、明星小学校の通学区域を南に広げました。あ
る程度一定の時間をかけながら、見直ししていく必要もあるのかと思
います。それが適正配置にも繋がっていくと思っています。

委員 そうですね。バラバラにならない方がいいのだろうけども、急激には
変えられませんので、どこかで変えていくべきと思います。

委員 この間、千歳に視察に行かせていただきましたが、その時は特に、防
災や地域コミュニティなどから、町内会を学校の方に合わせていくよう
にしないとダメだという意見が多く聞かれました。ですから、どちらを
大きくするかっていったら、学校を大きくしていかないとダメなのかと

思います。ただ、ものすごく難しいです。そんなに単純に線引きはできないと思いました。

委員 今まであった町内会を分けるということですか。

委員 その地域は分けるのではなくて、避難所をまとめてしまおうという形ですね。

委員 これは、防災計画との関係があるのですが、帯広市の防災計画を見ると、連合町内会単位で物事を調整したり、説明会をしたりしているのです。連合町内会の区域と学校の区域は違うので、連合町内会中心にやると、学校と合わなくなってしまいます。本来は小学校単位で防災計画を作れば、誰が見てもわかりやすいが、連合町内会の中には3つの小学校が入り組んでいる状況もあります。区域割りがバラバラなのです。帯広市の欠点は、住民活動組織によって組織の作り方がバラバラなところです。連合町内会や防犯協会、交通安全組織など色々ありますが、全て区域割りが違うのです。それが活動の弊害になっています。一番いいのは、市町連や連合町内会が小学校単位に合わせていくのが理想的です。小学校単位で防災計画を立てれば、みんな同じ小学校に避難することになるのですが、なかなかうまく行かないのです。

委員 この間揉めたのは、ある小学校の避難区域で町内会が分かれるので、なんとか1つにしてほしいというもの、うまくいってないですね。

委員長 他によろしいですか。ほかになれば、次の(4)エリア・ファミリーによる小中連携を議題とします。事務局、説明をお願いします。

【事務局説明】 資料 23-1 資料 23-2 資料 23-3 資料 23-4

委員長 今の説明に対して、何かご質問、ご意見ございませんか。

最終的には、将来この形でまとめればいいということですね。分かりやすいですが、そんなに簡単ではないですね。

委員 取組みの中で、中学生が小学生に勉強を教えたり、部活を教えたりという取組みはあるのでしょうか。

事務局 中学校の取組みにおいては、授業の一環で、小さい子どもと触れ合う機会があります。家庭科の中で、このエリアをきっかけにしながら、保育所に出向いて子どものお世話をしています。しかしながら、小学校・中学校の学習時間の中で、小学生に中学生が継続的に学習を教える時間は、今の授業時間の中では設定できていません。

委員 勉強でインプットしたことを教えたり、アウトプットしたりすることで、身につくことも多いと思うので、少しでも、そういう機会があればいいと思いました。

委員 カリキュラムで、全員がそういうのをやらなければならないとなると

問題が出てくるのですが、大学のサークル活動のように、興味のある子ども達がやるのはいいと思います。

委員 夏休みのボランティアなどだったら、役に立つかもしれませんね。

委員 児童生徒同士で学び合うのはいいですね。

委員 学校によっては色々な事例はあるけれど、例えば緑園中学校では、のみ保育園に行って、一定の時間の中で中学生が自分達でプログラムを立てて保育活動をしています。ですが、学校によって、一生懸命やっているところとあまりやっていないところの差がありますね。

委員 それが問題ですよ。14のエリアで、それぞれ計画や目標が大きく異なることは、基本的にはあまりないと思います。

委員 この案件は、学校の教育課程内で行う部分と課程外で行う部分があるので、その学校の実態を考えながら工夫せざるを得ないと思います。

委員 中学校では、教育課程内で家庭科の時間で保育体験をするため、近隣の保育所で行う時間があります。総合的な学習の時間の中では、保育所に行って子ども達を楽しませる計画をして、紙芝居やったり人形劇を作ったり、実際訪問してきて、まとめるということをやっている学校もあります。また、教育課程外では、夏休みの間に近隣の保育所から保育ボランティアの募集が来まして、手を挙げる生徒がいるのかと思いながら生徒に紹介したら、応募が殺到しました。人の役に立ちたいということなのでですね。頼りにされるのが、子ども達にとってはやりがいのあることで、定員をすぐオーバーしてしまったと、嬉しい悲鳴をあげています。

委員 今回の件と非常に関係あるのですが、エリア・ファミリーも、大きいことだと思うんです。合わせて、地域コミュニティやコミュニティ・スクールなどをある程度、関連させながら進めていくのか。それとも、地域の人達がここにどのように参加していくのかは、また別の角度で考えることでよろしいでしょうか。

事務局 適正配置・適正規模は、教育環境を整えていく手段の一つとして考えています。また、お話の通学区域については、どういう形で整えていくか、そして、コミュニティ・スクールは、地域に開かれた学校としてどうあるべきかというも課題と捉えています。意識調査の中で少し入れたのは、そういった観点もあります。適正配置、通学区域、エリア・ファミリー、9年プログラムなどを複合的にやっていきますが、これだけで全てができるものではありません。コミュニティ・スクールも、徐々に環境を整えながら備えていかなければならないと感じています。

委員長 エリア・ファミリーについてはよろしいですか。

それでは、次の(5)適正化に向けた取組みを議題とします。適正化

に向けた取組みということで、農村部と市街地とは大きく環境が異なるので、同じ基準にはならないと思いますが、それを前提に、ここは是非押えておきたいというポイントについて意見をいただきたいと思います。事務局、説明をお願いします。

【事務局説明】 資料 24 資料 25

委員長

今の説明に対して、何かご質問、ご意見ございませんか。

この資料 24 の推計は、現状のまま推移したらということで、改めて子ども達の数が減っていくと思いましたが、どうでしょうか。

委員

児童生徒数の推移のグラフと表を提供いただいたのですが、平成 43 年に、帯広市の人口をどのくらいとして推計したのかをお尋ねします。今年までに生まれたお子さんの数については、正確に出せると思うのですが、平成 34 年か 35 年くらいになると推計ですよ。もう一つは、特別支援の児童生徒数の推移について、どうしてこういう人数になるのかお尋ねします。

事務局

まず、平成 43 年の市の人口ですが、私どもの人口の推計の仕方が、本市の人口の推計とは異なっておりまして、まずは過去 3 年の人口をそれぞれの学校区ごとに移動したと考えながら、子ども達が転校したり転入したりというところも含めて、学年ごとに数を推計しています。それと平成 43 年の推計ですが、15 歳から 49 歳までの女性が、子どもを何人産むのかという、母の年齢階級別出生率というものがありまして、それをもとに児童生徒の推計をしたものです。「増田レポート」の人口推計とはリンクしないと考えていただければと思います。

続いて特別支援学級の児童生徒数は、3 ページ以降にそれぞれ特別支援学級の子どもの数を記載しています。割合を計算して学校ごとの子どもの数から、推計したものです。具体的に言いますと、帯広小学校の知的学級の児童は約 2% 程度、情緒学級の児童は 3.6% 程度で推計しております。小学校と中学校で少し割合が変わっています。

委員

理解はできましたが、教育委員会の推計の方法では平成 43 年に帯広市の人口は、どれくらいになりそうなのですか。見た感じ少子化といわれるほど子どもの数が減っていないような気がするのですが。

委員長

データはないのですか。

事務局

私どもで持っているデータは、お示ししている児童生徒の数、6 歳から 15 歳までの数だけです。それ以外は推計していません。

委員

帯広市の子どもの数は減るには減るのですが、そんなに急激ではないですよ。

委員

ただ、国の推計と市町村推計にずれがあるので、どちらが正確かとい

うのは私達ではわからない。道や市町村で出しているものと国の将来推計が違うのですよ。

委員 例えば、柏小学校の数字を見ると意外に減らないですね。425人いるのですが、十数年経ってそれほど変わらないものですから、本当かという感じがするのですよね。地域が高齢者ばかりですからね。

事務局 小学生の場合は、0歳児から小学校に上がるまでの実数値は持っています。その持っている数字で、5、6年の間の誤差は少ないと思います。その後につきましては、生まれていない子どもを勘定するわけですから、推計となります。推計の基となる考え方を、先ほど申しあげましたように、そのエリアにいる15歳から49歳までの女性の数を捉まえて、そこから出生率で推計していく。そういう2段の計算をやっているのです。中学校については、12歳までの実数が出ていますので、そこをベースとして小学校と同じような推計をしています。

委員 十何年先を正確に把握するのは難しいことだと思います。

委員長 他に、どうですか。

では、適正化の考え方について、何かご意見ありませんか。

委員 この間も話が出ていましたけど、適正規模は、若干の見方の違いがあったとしても、適正配置になるとメリットが多い。一番問題になってくるのは、統廃合でなくなる学校にいた子ども達に対して、地域がどう対応していくのかが、課題として残っているので、そういうものに対して、どう考えて、どう配慮していくのかが、大事なことだと思うのです。それに対して私達の意見もまだ出していないけれども、教育委員会の考え方も出てない。適正規模と適正配置が矛盾する可能性があるのではないかと、思っているのです。私達も教育委員会もその辺を整理できるのか。それに今までも出ているけど、ここの学校は新しいとか、財政的に余裕がないから改築できないなどを色々加味しながら、将来のことを考えていかないとならないので、その辺の議論も大事ではないかと考えたのですが、どうでしょう。

委員 さきほどのエリア・ファミリーの図では、適正規模に届かない学校同士を一緒にすれば、クラスは増えるということになりますよね。だけど、児童生徒達をどうフォローするのが大事で、校区や通学距離や歴史など色んな問題が出てくると思うのです。人口がどんどん減って、一切考えず適正化していけば、最終的には学校が一つになってしまいます。

委員 そういう議論をしていけば、大正地区は大正小学校で、川西地区は川西小学校という話になってしまう。そうすると、議論はいらなくなるってなってしまう。

- 委員 それではちょっと乱暴な結論になってしまうので、そこに至るまでに、子どものことを考えて、どこに気をつければいいのか。逆に言うと、今のままだとだんだんデメリットが増えてくる。
- 委員 現状から結論だけを考えるのではなくて、その過程も考えないとダメかもしれないこともありますよね。
- 委員 今さらですが、平成18年の前回の適正配置の話があった時の案はなくなっただけでいいですね。
- 事務局 今、方針を新たに作ろうとしていますので、今までの話はゼロベースになるのかは分かりませんが、ないものとして考えていただきたいということでございます。
- 委員 ここでは、前回のような例えば3校を2校に、この地区は1つにというところまで突っ込んだ考えをまとめるのでしょうか。
- 事務局 違います。帯広市全体の総論的な考え方を、皆さんで論議していただいて、それを基に市教委が方針を策定していきます。個別の学校をどうするかというところまで、皆さんにお願いしているわけではありません。
- 委員長 理想論だけで現実的でないようなまとめ方は、私は無責任のような気がします。1から考え直すといっても、現状を見ると状況は大して変わってないですから、ひょっとすると同じような方針が出ることも考えられます。みんなで課題を出してもらって、できれば尊重していただきたいと思います。
- 委員 いただいた資料に目を通し、委員の皆さんのご意見を聞いたら、皆さんがおっしゃっていることに間違いはないです。2回目のお話の中に、農村部と市街地は違うというお話がありましたが、私もそう思います。市街地は市街地の基本線があり、統廃合が起こりうるということはあると思いますが、一方で農村地区は、色々な配慮というか考えなくてはならないことがあると思います。だから、一律にはならないと思います。
- 委員 学校の役割が、子ども達を教育するだけではないというところで、統合するのは、色々な課題があるのだらうと思います。
- 委員 通学距離にもおおよその基準があるのですが、「バスに長く乗っている子が1時間弱です」と済ませないで、どうするかをここの中で考えていかないと。歩いて通う子ども達の学校だけのことを考えるのではなくて、そういう子ども達はどうしたらいいのかを考えていかないとなりません。今まで統合の問題で、後から揉めているのが、デメリットだけで、メリットについてはあまり揉めないですよ。だから、そこに温かい目を向けないと、なかなか解決できないと思います。その部分がすごく大事なので、市街地と農村部とは同じ基準、同じ視点ではなくて、考え

るところがあつていいと思います。

委員

適正規模の答えは1つではなく、例えば農村部と市街地とでも、適正規模はいくつか出ると思います。それでアンケートのデータは、すごく大事だと思います。さっきの校区図のエリア・ファミリーも考慮しなければなりませんよね。それから、もう一つ将来推計も、5年ないし10年後の推計データが出ていますから、適正配置にする為には説得力があると思っています。

委員長

適正規模や基準が大事なのではなく、数の問題でもなくて、教育の中身として、こういう教育を提供できるように、それぞれ地域で工夫しましょうというまとめになればいいですよ。とはいえ、何かしらの基準を作らないとならないですね。

委員

でも、単純に人口が増え子どもの数が増えたら、当然、学校は子ども達のために増えていかないとダメですよ。逆に人口が減って、子どもの数が減れば、学校の数が減るのは当たり前じゃないですか。それが基本だと思います。ただ、子どもが1人だろうが5人だろうが、帯広市の方針として、そこの学校は残すという強い意志で残していくのも1つの考え方だと思います。今の親御さんが、複数学級でもあった方がいいという意見を持つのは、ごく自然だと思うので、そのために再編成をするのも、ごく自然なことではないかと思います。先ほどから出ている通学時間が、統合によって極端に長くなるのであれば、見直さなければならぬと思います。川西小の児童で広野よりもまだ芽室側に住んでいる子は1時間かかります。その子は広野小学校に行ったら40分か35分くらいで着くのではないかと、そういう考えも出てくると思います。その辺は、親御さんなりご家庭が決めることだと思うのですが、デリケートで微妙なところだから、選択の余地を持たせるのは大事だと思います。そういう面でもシンプルに考えればいいと思います。

委員長

シンプルではダメだって方は、いらっしゃいますか。

委員

シンプルでいいと思いますよ。

委員長

シンプルだけど文科省の資料は、「それぞれの地域で考えるように」となっています。

委員

難しいですね。

委員

色々なことが絡み合っていて、すごく難しいと思います。統合をすると分断されるようなところが出てきて、その時期に、たまたまいた子ども達が苦勞するけれど、それが何年か経つと、定着するのでさしたる問題にはならないでしょうけど、そこが難しいと思います。それと、1時間バスに乗るって、1時間活動できなくなることですよ。養育センタ

一の例ですが、子どもは1時間乗っていたら不機嫌になり、狭い空間でストレスもあるのです。子ども達は早く降りたいので、「今日、何番目に降りるの。」と、確かめたがります。早く降りたら、お家の中で、これをやりたいという思いがあって、それが叶わない時もありますよね。それがトラブルの原因になったりすることもあるので、1時間乗ってもいいという発想は、子どもの目線で考えた時に、それでいいのだろうかと思えます。

委員長

通学時間も通学路も重要なところですよ。

委員

現実として、川西小学校は昭和52年に統合しましたが、その時代からそうですよ。全国一の面積を有していた町、足寄にもいたことがあるのですが、長い通学時間は好きでそうしているわけではなくて、学校を残すか統合するかという最終選択です。朝から1時間、スクールバスに乗ってくるのは、できれば避けたいところではありますが、やむを得ない判断にならざるを得ないのではないのでしょうか。

委員

タクシーなどは、難しいのですか。

委員

コストがどうでしょうか。

委員

乗り合わせの近い人と一緒に3人くらいで乗ってくる小さな車などはないかと思うのですが。

委員

そうですね。

委員

私も、学校から家まで車で行けば15分くらいなんですけど、バスを使って乗り換えになると1時間以上かかってしまうので、本当にストレスになります。

委員

今のスクールバスの問題、昔から課題は多いです。バスの通れない道もあるので、バスに乗るまで家から結構歩かなければならないなどの課題もあります。

委員

より安全安心のことを考えて、道の反対側では乗り降りしないようにしているのです。必ず家側というか手前側に降ろす。だから路線が非常に複雑になっているのはありますね。

委員

スクールバスは砂利道を通らず、舗装までの送り迎えなのです。だから、住宅まで500mとか歩かないとまらない場合もありますね。

委員

「もっと、自宅の近くまで来てくれないか」という要望が多いと清川小学校でも言っていました。

委員

そうですね。

委員

その子だけを迎えにそこまでは行くのですが、砂利道500mあることで玄関先までは行かないのです。

委員

スクールバスの課題は多いです。

- 委員 もし大正小学校だけになったら、もっとバスに乗る時間が長くなるわけですよ。そうしたら1時間だけでなく1時間20分になる可能性もある。それがやむを得ないから、しょうがないと処理するのでしょうか。
- 委員 乗り合いのタクシーやスクールバスの台数を増やすことによって、ある程度の緩和はできると思います。
- 委員 そうですね。
- 委員 1台増やすだけでも、相当な効果があると思います。
- 委員 他のまちでは、6人や10人くらいの小型にしているところもあります。
- 委員 バスに長く乗っていると体力が衰えるので、体力向上が課題ということが文科省の手引にも書いてありますよ。
- 委員 往復3キロ歩いている子どもであれば、年間200日行ったら600キロですか。1年間それだけ歩きますよね。片方はバスに乗っているだけですから。
- 委員長 今までの議論を踏まえながら、農村部と市街地、それから通学のところも大きなポイントとなるという気がします。
- 委員 1点だけよろしいでしょうか。資料の24ですが、平成43年までの児童の推移で、清川小が相当減ってしまうという予想になっているのですが、ほとんどが農家ですから、農家が半分以下になると推計をしているのでしょうか。高齢化で後継者がいないとはいえ、ここまで落ち込むというのはちょっと疑問があるものですから。
- 事務局 先ほど言いましたように、市街地の方は3ヵ年の子どもの移動を見えています。農村部の方はあまり引越し等がないと考え、生まれたお子さんが、そのまま中学校を卒業するという前提で推計しており、平成34年くらいまでは実数でございます。それ以降は、この地域に住んでいる15歳から49歳までの女性の数を基に推計しています。もしかすると、農村部の出生率が高ければ、変わってくるかもしれませんが、地域ごとの出生率は出していないものですから、このような形になってしまうということを、ご理解いただければと思います。
- 委員長 誤差の幅がかなり広いのでしょうか。
- 委員 この数字だけ見ると、農家が半分になると見えるものですから。
- 委員長 とはいえ、数字を出さないわけにもいかないですよ。
- 事務局 ご承知のとおり、規模が小さくなると影響がすごく出やすくなってきます。機械的に女性の数をもって推計するので、とりあえず、こういう数字が考えられるという程度で押えていただければと思います。まだ生まれていない子を推計するものですから、その難しさはご理解いただ

ければと思います。

委員 理解いたしました。

事務局 清川小学校も学年によっては、2桁の児童の学年もあれば、1桁の児童の学年もあります。その2桁の学年の児童が卒業して行って、今度は1桁になってくるので、どうしても減っていく推計になってしまいます。

委員 計算式では、こうなるということですね。

事務局 ええ、我々が出来る範囲では、ということです。

委員 ちょっと、長い年数の推計を出しすぎかもしれないですね。わかっているところだけで押えておけばいいのかもしれないですね。

事務局 そういうことも考えたのですが、適正配置・適正規模をご議論いただく上では、一定のスパン、少し長い年数を見据えた方が、ご議論しやすいと考えました。あくまでも推計値でございますので、一つの約束事で作ったものとしては、こういう可能性があるのご理解をいただければと思います。

委員 10年後にまた再検討するよりも、もう少し先まで将来を見据えて考えていくというのは、当然かもしれないですね。また同じようなことを10年後にやるということにもならないでしょうからね。

事務局 実際に計画になったら、この推計というのは、非常に大事になってくるので、何年かごとに見直し作業が出て来るものと思っています。

委員長 ということで、ご理解いただけたと思います。

ほかに、よろしいですか。

全体を通して、よろしいですか。

では、その他、事務局から何かありますか。

【連絡事項】

3 閉会

委員長 それでは、以上をもちまして、第4回検討委員会を終了いたします。お疲れ様でした。

委員全員 お疲れ様でした。